

新しい歌をうたおう



第269地区「友」地区委員

並河 純 (※子)

この年度になって、ロータリーの混乱が目に見えるようになった。「混乱」と言ってもいいこういう動きは、今にはじまったことではない。20年くらい昔のことになるだろうか、「世界社会奉仕計画」が出てきた時、私のある友人が「力にかけりがみえはじめたアメリカの世界政策を肩代わりすることではないのか」と言ったことを覚えている。すでに亡くなったこの友人は、近ごろのR I 提唱プログラムについて「国連機関のなすべきことの肩代わり」と言いそうに思える。先年来の「3-H運動」にしても、ロータリーのなかで疑義が聞かれた。R I はそれに対して理事会決議(78-79)——'81年版「手続要覧」P162——によって対応したのはご承知の通りである。このごろの「友」をみるとR I 指定記事として「増強」「拡大」「財団推進」「国際共同委員会」等々、「量」と「カネ」との計画が、これでもかと出てくる感じである。「友」でみかける用語で「R I の官僚化」は、そんな感じを言うのではなからうか。

私もロータリーに入会して23年目になる。ロータリーのなかで人生の後半を過ごしつつあるものにとっては、とまどいを禁じ得ない。永い間に私たちのなかに体験的にしみこんでいる「職業を通じての奉仕」という考えはどうなったのか。少なくともロータリーの文献では過去のものとなった11条の「道徳律」をむしろかえすことはひかえるにしても、'81年版「手続要覧」までは生き続けてきた“Service through Rotary”という項目まで'84年版では削られてしまった。ど

こに行くのかロータリー！ロータリアンの心に燃え続けた炎は消されようとしているのか。

つぎのような言いかたを私はあまり好まないけれども、ライオンズクラブが“We serve…”で始まるモットーをかかげているのに対して、ロータリーは“I serve…”という文脈で語るものと説明されてきた。現に、国際理解や親善、そして平和もロータリアンの「親交によって」と綱領第4に明記されている。そこにロータリー活動における「自由」があり、もっとホンネ的に言えば「気楽さ」がある。ロータリーは職業人のクラブである。“we”で括られる活動には没頭しがたい日常がある。“I”で語ることができるゆとりと気楽さがあったこそ、その活動に参加できるというものだろう。これも「友」でみかけた語で「ロータリーのライオンズ化」とは、こういうことを言うのだろう。

現在、R I は「集団の力」に傾いているようだ。「ロータリアン必携」の「職業奉仕編」にはカーネギー基金会長の記事をわざわざ黄文字で引用している。すなわち「現代においていかなる職業についている人も集団の力によってでなければ、自分が社会に対して当然あたえうる影響もあたえられなくなる」というのである。個人の活動から集団の奉仕へとウェイトが移っている。これを時代の要請、時の流れと言ってしまうのもだろうか。しかし、ロータリーは創立以来80年、まことにたくみな妥協によって調和を見い出してきた歴史がある。話題の「決議23-34」にしても分裂の危機と言われた時の賢明な妥協であった。さらにさかのぼれば、創立初期、意見がきびしく対立するなかで、一人のメンバーがうたい出した歌によってみごとに対立を回避したという話も伝わっている。ロータリーソングの始めである。いま、まさに「飽食の時代」R I から出されるもりだくさんのメニューの消化にいささか困惑しているのが、実状であろうか。このへんで、新しい歌をうたってロータリーの原点にかえろうではないか。

(液化及圧縮ガス)